

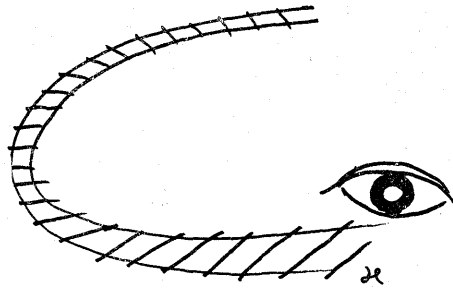
赤
い
火

文と絵

柴 岡 治 子

幼稚園のお友だちの一人のおじいさんとおばあさんは、外国人でした。どこの国の人だったかは覚えていません。おばさんがそのお友だちの家に遊びに行っていた時に、遠い国から外国人のおじいさんとおばあさんが来ていて、おみやげを広げておばさんにもみせてくれました。

それは銀色のレールをまあるくつないで、その上を汽車が走るので。もう五十年以上も前のことですから、そんなおもちやおばさんは見たことがありません。何だか思い出す



と、その汽車は赤い火をふいて走ったような気がします。びっくりしたお婆さんは、きつとおしゃべりをやめて、じっとそれをみつめていたのでしよう。そしてふと淋しそうな顔をしたのかも知れません。何だか小さなおもちやをもらいました。

もうお家に帰っちゃおうと急に思ったのをおぼえています。淋しそうなのは顔だけでなく、気持ちもきつと淋しかったのだと思います。

そんなおもちやのある遠い国、何だか夢の中にいるような気持ちになっていたのかもしれない。そしてお友だちも、遠い国の人のような気がしました。

まだタタミの家の多かった頃で、銀色のレールはタタミの上敷かれていました。

赤い火はほんとうにふいていたのかな――。